

インターネット公開許諾のない文章には  
墨塗り処理を施しています。

## 時評

浄土学専攻 四回生

漆間 宣隆

六月二十五日の毎日新聞夕刊に、東本願寺が教化（伝道）について第一線の住職がどう考えているかという意識調査で、昨年九月全国の末寺九千四百二十一ヶ寺の住職にアンケート調査表を送って六千七百九十ヶ寺から回答があり、その結果は、最も関心を持っている問題に「教化」をあげたのは半数に足らぬ四十七%だけにこれに対し、「寺院経営」という答は九十%、このほか「学習」は七十八%、「儀式」が八十三%、「寺院管理」七十二%などで教化に対する低い関心と経営への異常に高い関心がわかり、調査にあたった東本願寺企画室では「寺院経営に高い関心をみせているので、これをテコに教化を考えれば教化推進ができるのではないか。とにかくきれいごとでは通用しないところへきており、教化そのものが寺院収入をうるおす方向を見出すことが必要だ。」と話している、と報じた。この事は、物価高などが末寺経営にも敏感に反映しているといえそうであるが、今少し考えてみたいと思う。この当世住職氣質というものは何も真宗に限った事でなく他の多くの宗派にもいえることと思う。現在の佛教界の在り方が世間からいろいろと批判されているのはこのあたりに問題があ

ると思われる。つまり、御布施を頂き、佛飯を頂く僧侶の成さねばならぬ「教化」に対して住職がそれ程意識せず、唯々寺院の管理経営、儀式をすればそれでよいという自己満足におちいつているのではあるまいか。自行化他という佛弟子としての精神である化他が忘れられている（現在では自行の方もあやしいものである）ということに現代の住職は勿論、佛教を学ぶ我々は、今一度猛反省すべきである。まして本来の人間性が失われつつある今日、僧侶は、もともと積極的に眼を向け、その中にとびこみ、人々と共に悩み考えそこから人間本来の生き方に人々をリードする精神の匠者としての責任を持たねばならない。教化というのは、自分自身を偽ることなく、自策自励求常住の気持ち忘れず大いなる菩提心（大我）を持って本来の人間発見を多くの人々にしてもらう為に努力することであると思う。そしてそこでは、教化によって利潤を追求するなんて考えは全くナンセンスであり、佛教教化の本質を否定するものである。私の頭の中には、今でも林隆碩上人の御言葉が残っている。「およそ寺なんてものは、僧侶が自行化他に真剣に励んでおればつぶれんものだ。」

私達は、この矛盾だらけの世界に於て法輪を転ずるものとし今一度、現実の社会、人間・僧侶・自行化他というものを真剣に考えてみる必要がある。